

宮崎市文化財調査報告書第42集

史跡 生目古墳群

—— 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅰ ——



2 0 0 0

宮崎市教育委員会

序

国指定史跡生目古墳群の保存整備事業は、国、県をはじめ多くの方々のご指導、ご協力を賜り、無事、第1年次の事業を完了することが出来ましたことに深く感謝申し上げます次第であります。

宮崎市制70周年事業の一つに取り上げられた生目古墳群史跡公園整備事業も、事業開始からはや7年が経過し、その間、平成5～7年には周辺遺跡確認調査の実施、8年度には整備委員会の設立、9年度には整備基本構想・基本計画報告書が完成、そして、平成9年度より行われた用地取得も今年度終了し、一步、一步着実に平成19年度の開園へ向けて進められています。

また、平成11年11月に宮崎公立大学講堂に於いて行われました生目古墳群シンポジウム'99も大盛況のうちに終了し、市民の生目古墳群に対する関心もますます高くなってきております。

本報告書は平成10年度に行われた第1次調査の概要報告書であります。第1次調査は3・4・5・6・旧14号墳の5基の古墳について実施し、宮崎の古墳文化研究に新たな資料を提供することができました。なかでも、古墳群最大の3号墳の前方部からは、見事な葺石が発見されました。この葺石を眺めると、この巨大で荘厳な古墳の被葬者はどのような人物であったのだろうか、なぜ、この地に古墳を築いたのだろうか、古墳築造に携わった人々はどんな思いでこの途方もない構造物を造り上げたのか……等々、古代への思いは募るばかりです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご配慮、ご協力をいただきました関係機関の方々、ご指導、ご助言いただいた先生方、ならびに発掘調査に従事された作業員の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例 言

1. 本書は、史跡生目古墳群保存整備事業に伴う平成10年度発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成10年12月15日～11年3月31日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び、調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 調査組織
調査主体 宮崎市教育委員会
文化振興課 課長 野間 重孝
文化財係 係長 永井 淳生
調査事務 主事 竹野 隆司
調査員 技師 鳥枝 誠
〃 技師 時任 直也 (平成10年度)
〃 技師 稲岡 洋道
〃 技師 宇田川美和
補助員 嘱託 椎 由美子
〃 〃 松永 光雄
〃 〃 小川 正子
〃 〃 久富なをみ
〃 〃 河野賢太郎 (平成11年度)
5. 本書の執筆は鳥枝が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は鳥枝・時任・稲岡・宇田川・椎・松永・小川が分担して行った。
7. 現場及び遺物写真撮影は鳥枝・時任・稲岡・宇田川・河野が分担して行った。空中写真撮影については、株式会社スカイサーベイに委託した。
8. 本書の編集は鳥枝・久富が行った。

本文目次

第I章 生目古墳群の概要…………… 1	第IV章 5号墳の調査…………… 14
1. 古墳群の立地と自然環境…………… 1	1. 調査前の状況…………… 14
2. 古墳群整備に至る経緯…………… 1	2. 調査の概要…………… 14
3. 古墳群の現状と現在までの調査経過…………… 1	
4. 古墳群周辺の歴史的環境…………… 4	第V章 6号墳の調査…………… 17
	1. 調査前の状況…………… 17
第II章 3号墳の調査…………… 10	2. 調査の概要…………… 17
1. 調査前の状況…………… 10	
2. 調査の概要…………… 10	第VI章 旧14号墳の調査…………… 18
	1. 調査前の状況…………… 18
第III章 4号墳の調査…………… 13	2. 調査の概要…………… 18
1. 調査前の状況…………… 13	
2. 調査の概要…………… 13	第VII章 まとめ…………… 19

第1章 生目古墳群の概要

1. 古墳群の立地と自然環境

生目古墳群は、市街地より北西に直線距離で6kmの宮崎市大字跡江字井尻、上ノ迫、石ノ迫に所在する。古墳群は、大淀川下流右岸に位置する東西約1.2km、南北約1.2kmの長靴状の形状を呈した丘陵上に立地しており、丘陵は宮崎層群、礫層、シラスが堆積して形成されている。

丘陵上の大半の古墳は、標高約25～30mの比較的平坦な中央部から南部に築かれており、丘陵西側は最高点44.4mを測り、急峻で、複雑な地形を呈する。丘陵間の開析谷には深田池、深田上池、上の迫池、城ノ下池といった溜め池が造られている。丘陵周辺は水田地帯で、丘陵北東の沖積地上には集落が広がっている。

2. 古墳群整備に至る経緯

生目古墳群は、昭和18年9月8日に国の史跡に指定された。指定当時は前方後円墳7基、円墳36基の計43基の古墳が存在したが、昭和36～38年にかけて行われた上ノ迫土地改良事業により一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化した。また、土地改良事業中の昭和37年には古墳標石、道標石、説明板の設置等の整備が行われている。

昭和50、51年度には、国庫補助事業で、航空測量による地形図及び、『生目古墳群保存管理計画策定書』が作成され、昭和57年度には古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施している。

平成5年度には、「宮崎市制70周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられ、平成5～7年度にかけて、国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施した。

平成8年7月には、委員15名より構成される生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催、平成9年度末に『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』をまとめた。

平成9、10年度には丘陵南東部に立地する石ノ迫第2遺跡の調査を実施し、平成10年度より、史跡整備に伴う古墳群の本格調査に着手した。

3. 古墳群の現状と現在までの調査経過

古墳群は現在、跡江丘陵上に前方後円墳7基、円墳20基、丘陵下に円墳2基の計29基の高塚古墳が所在し、その他、発掘調査等によって確認された円墳7基、横穴基9基、地下式横穴墓14基(全容が明らかなものは8基)より構成される。

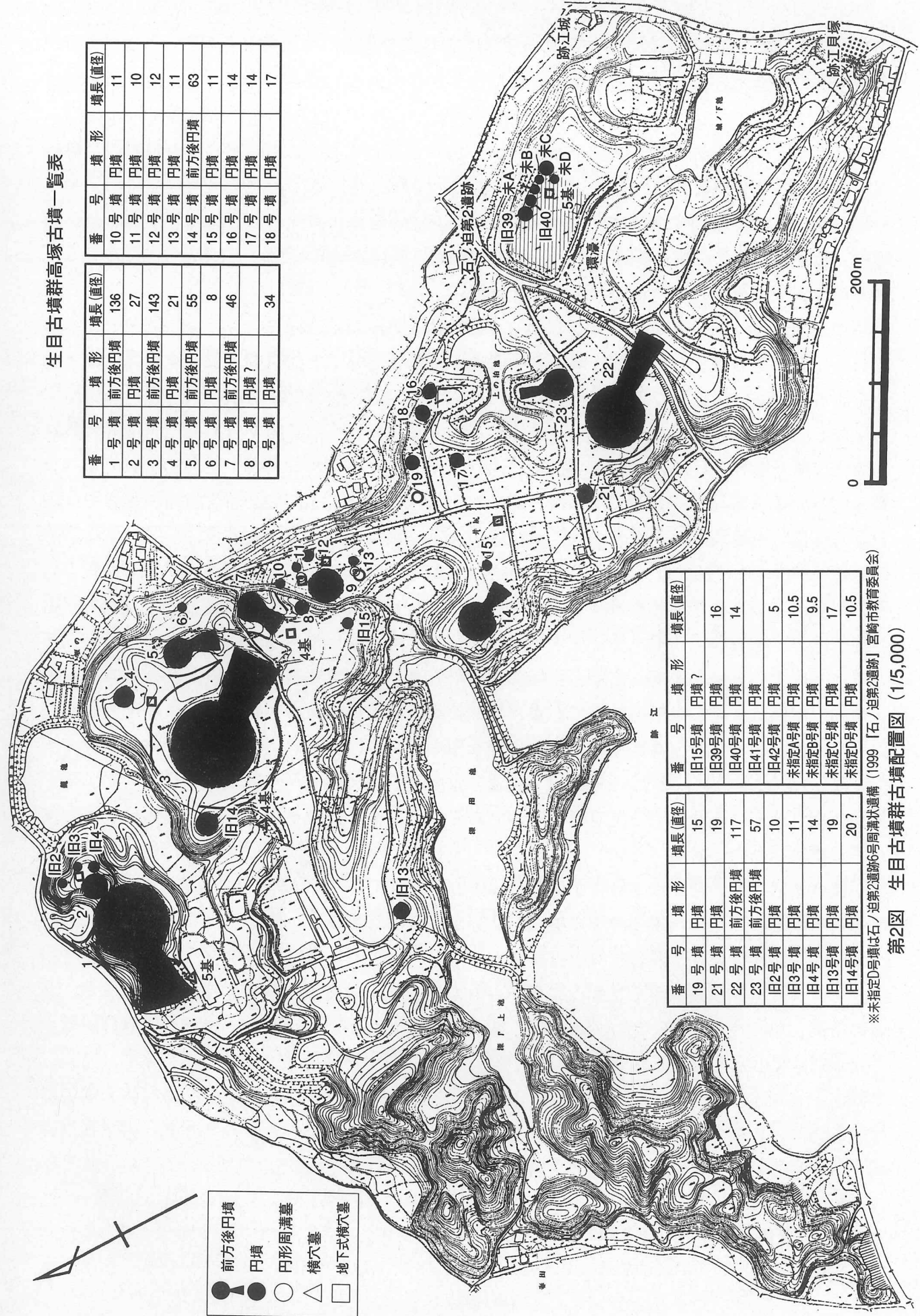
丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1・2・旧2～4号墳、地下式1号墓の6基は、丘陵北側、谷を挟んで対峙する独立丘陵(最高点37m)に立地する。横穴墓は、1号墳前方部南側側面に5基、3号墳後円部西側の崖裾に4基構築されている。丘陵下の2基は標高7～9mの微高地上に立地している。また、現古墳番号は1～23号(20号は欠番)まで

第1図 生目古墳群位置図 (1/100,000)



生目古墳群高塚古墳一覽表

番号	墳形	墳長(直径)	番号	墳形	墳長(直径)
1号墳	前方後円墳	136	10号墳	円墳	11
2号墳	円墳	27	11号墳	円墳	10
3号墳	前方後円墳	143	12号墳	円墳	12
4号墳	円墳	21	13号墳	円墳	11
5号墳	前方後円墳	55	14号墳	前方後円墳	63
6号墳	円墳	8	15号墳	円墳	11
7号墳	前方後円墳	46	16号墳	円墳	14
8号墳	円墳?		17号墳	円墳	14
9号墳	円墳	34	18号墳	円墳	17



- 前方後円墳
- 円墳
- 円形周溝墓
- △ 横穴墓
- 地下式横穴墓

番号	墳形	墳長(直径)	番号	墳形	墳長(直径)
19号墳	円墳?	15	旧15号墳	円墳?	
21号墳	円墳	19	旧39号墳	円墳	16
22号墳	前方後円墳	117	旧40号墳	円墳	14
23号墳	前方後円墳	57	旧41号墳	円墳	
旧2号墳	円墳	10	旧42号墳	円墳	5
旧3号墳	円墳	11	未指定A号墳	円墳	10.5
旧4号墳	円墳	14	未指定B号墳	円墳	9.5
旧13号墳	円墳	19	未指定C号墳	円墳	17
旧14号墳	円墳	20.7	未指定D号墳	円墳	10.5

※未指定D号墳は石/土築2道跡6号周溝状遺構 (1999「石/土築2道跡」宮崎市教育委員会)

第2図 生目古墳群古墳配置図 (1/5,000)

の22基の古墳にのみ付してあり、指定時の番号とは異なる。

古墳群の史跡指定以前の調査及び資料としては、昭和16年に原田仁により100m級の大型前方後円墳である1・3・22号墳の実測図が作成されており¹⁾、また、地元には戦前(昭和10～14年頃)に作成された古墳案内略図(徳地一作図)が存在する。この絵図には台地上に前方後円墳8基、円墳27基、丘陵下に円墳3基が記されている。

昭和49年には、前年に破壊された3号墳後円部西側の4基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、装身具類(貝釧、耳環)、馬具類(轡、貝製雲珠)、武器・工具類(鉄鏃、刀子)等豊富な副葬品を伴っていたことが確認された。

昭和58年には、丘陵下の城平地区に所在する旧41号墳の確認調査を実施、墳丘周囲に4本のトレンチを設定し調査を行った結果、深さ50cmの周溝が巡ることが確認され、周溝外径は8.5mを測る。遺物は出土しなかったが、径5m、高さ1.5m程度の円墳に復元される。

平成5～7年度に行われた生目古墳群周辺遺跡発掘調査は、はじめて行われた古墳群の本格的な発掘調査である。調査の結果、従来、分布していないといわれていた地下式横穴墓が8基(全容の明らかなものは2基)検出された。前方後円墳である5・14・22号墳周囲の調査では墳丘から転落した葺石が検出され、22号墳の前方部西側裾からは、転落した葺石に混じって、壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧2～4号墳、旧15号墳周囲の調査を行い、その位置を確認した。弥生時代の遺構としては、13号墳南側、17号墳西側から周溝外径7m程度で、二段掘りの土壇を主体部とする円形周溝墓が検出された。その他にも、3号墳から15号墳にかけての丘陵中央部に広がる平坦面から計6基の土壇墓が検出された。また、市道を挟んだ丘陵南部は、中央に谷を挟んで、東、西2つの丘陵に枝分かれしており、東側の丘陵平坦面の南東側斜面からV字溝が検出され、環濠を巡らした弥生時代の集落の存在が確認された。環濠は5箇所の特レンチ及び、掘削により露出した崖面で検出され、上部は削平を受けていたが、上幅、深さともに2m以上の大規模なものである。その他に、環濠内側からは竪穴住居、土壇墓等が検出された。

平成8年度には、宮崎大学考古学研究室によって、3・5・7・14・22・23の6基の前方後円墳及び、その周辺の円墳の詳細な墳丘測量図が作成された。

平成9、10年度には、丘陵南東部に所在する(標高25m、比高16m)石ノ迫第2遺跡の発掘調査を行った。本遺跡は平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。調査の結果、竪穴住居35軒、竪穴状遺構20基、土坑33基等が検出された。遺構の時期は、弥生時代中期中葉と後期後葉～終末期の2期に分けられ、後者の方が遺構の分布は密である。また、土壇墓が43基検出され、墳丘が削平され所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した。その他、新たに中期～後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出された。

4. 古墳群周辺の歴史的環境

〔旧石器時代〕

旧石器時代の遺跡は、宮崎市北西部の標高90m前後の垂水台地上に分布する。金剛寺原第1・第2遺跡、垂水第1遺跡、阿部ノ木遺跡の4遺跡が発掘調査され、礫群、集石が検出され、ナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、石錐、剝片尖頭器等が出土している。

〔縄文時代〕

縄文時代の遺跡も前述の垂水台地に数多く分布しており、伊屋ヶ谷遺跡、小原山第1・第2遺跡、金剛寺原第2遺跡、阿部ノ木遺跡の5遺跡が発掘調査されている。いずれも早期の遺跡で集石遺構が検出され、前平式土器、吉田式土器、押型文土器、塞ノ神式土器等が出土している。垂水台地から南に伸びる丘陵の先端には、早期の貝塚である柏田貝塚が所在する。大淀川を挟んだ右岸、古墳群の立地する跡江丘陵南東端には、ハイガイを主とする上層とシジミを主とする下層の2層の貝層が確認され、縄文時代早期の押型文土器、塞ノ神式土器等多種にわたる土器が出土した跡江貝塚が所在する。

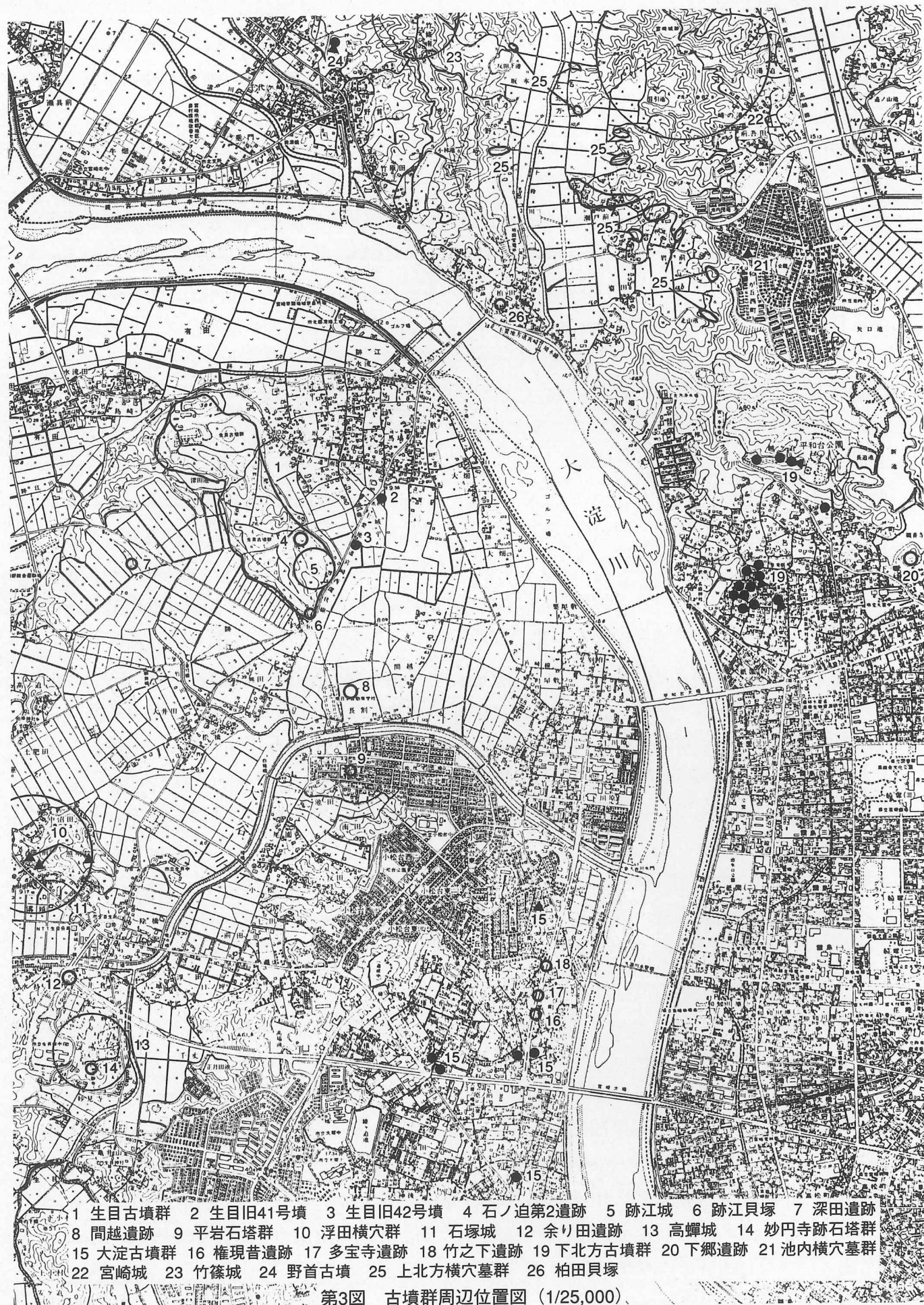
〔弥生時代〕

弥生時代の遺跡は、跡江丘陵南東端から東へ約2.9km、大淀川左岸の標高30m、東側沖積地からの比高20mを測る丘陵上に下郷遺跡が所在する。下郷遺跡は、弥生時代前期末～後期後葉の環濠集落で、竪穴住居22軒、竪穴状遺構25基、貯蔵穴19基、土坑22基が検出され、多量の弥生土器、石器が出土している。また、線刻土器が19点出土しており、うち7点については絵画的な線刻を施している²⁾。下郷遺跡の立地する丘陵裾には茶園遺跡が所在し、中期初頭～後葉の土器が出土している。茶園遺跡の東側に隣接する垣下遺跡からは、中期の溝状遺構、旧河道と思われる大溝遺構が検出され、弥生土器、竹製の筥、鍬等の木製品が出土している³⁾。垣下遺跡の北東約900mの標高7.5mの微高地上に後期後葉～終末期の土器溜まりが検出された赤江町遺跡が所在し⁴⁾、垣下遺跡の北約1.6kmの標高約12mの沖積地には、黒太郎遺跡が所在する。黒太郎遺跡からは後期初頭の溝状遺構、後期後葉の周溝状遺構が検出されている⁵⁾。

大淀川右岸は、現在までのところ左岸に比べて弥生時代の遺跡の分布は希薄である。跡江丘陵南端から南へ500mの大谷川左岸の標高7mの微高地上には、後期～終末期の竪穴住居2軒、土坑10基が検出された間越遺跡が⁶⁾、更に南東へ約1.8kmの標高8mの微高地上には後期の竪穴状遺構が検出された権現昔遺跡が所在する。跡江丘陵西端から南西約2.5kmの丘陵に挟まれた標高9～10mの谷部分には二月田遺跡が所在する。二月田遺跡では溝状遺構が検出され、中期～終末期の土器が出土している⁷⁾。

〔古墳時代〕

跡江丘陵の周辺には数多くの高塚古墳、横穴墓が所在している。大淀川左岸の古墳としては、丘陵南東端から東へ約2.1kmの標高20mの台地上及びその北方の標高70mの丘陵上に下北方古墳群が所在する。下北方古墳群は、前方後円墳4基、円墳13基、地下式横穴墓9基より構成され、5世紀中葉頃に古墳の築造を開始している。昭和50年に調査された5号地下式横穴墓は⁸⁾、径22mの円墳である9号墳の西裾に竪坑を掘り、墳丘下に奥行き5.35m、幅2.66m、天井高1.7mを測る長大な妻入り長方形の玄室を構築している。玄室床面には小円礫が敷きつめてあり、中央に大きめの円礫で囲った長さ3.5m、幅0.8mの屍床を付設している。玄室内か



らは、装身具類（金製垂飾付耳飾、勾玉、管玉、ガラス製丸玉、変形半円玉）、鏡類（変形獸形鏡、変形紋鏡）、武器類（直刀、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃）、武具類（横矧板鋌留短甲、三角板鋌留短甲、眉庇付冑、頸甲）、馬具類（鞍金具、鐙、馬鐸、三環鈴、杏葉、轡鏡板）、農工具類（手斧、鉄斧、鑿状鉄器、鎌）等豊富な副葬品が出土している。丘陵上に立地する下北方13号墳は、墳長100mの前方後円墳で昭和26年に調査されている。調査の結果、川西編年V期に相当する円筒埴輪、人物、動物、器財等の形象埴輪が出土している⁹⁾。また、下北方古墳群の立地する台地の南東、標高9mの微高地上には周溝、周堤を巡らした墳長85mの船塚古墳が所在している。

下北方古墳群の北方約1.5kmの丘陵東側から伸びる尾根の斜面に池内横穴墓群が分布する。横穴墓群は、6世紀後葉～7世紀末の横穴墓31基から構成される。調査後、大半の横穴墓は団地造成により消滅したが、A1～4号墓の4基が県指定史跡として保存されている。平成7年に池内横穴墓群調査整理委員会により、現存する4基が構築されている丘陵の地形測量が行われ、頂部が前方後円形を呈することが指摘されている¹⁰⁾。池内横穴墓群が立地する丘陵の西側斜面及び、谷を挟んで、西側の丘陵東側斜面には50基あまりの横穴墓より構成される上北方横穴墓群（県指定史跡瓜生野村古墳）が分布する。跡江丘陵北端から北へ約1.8km、標高28mの丘陵縁辺部に墳長30m程の前方後円墳である野首古墳が所在し、更に北西1.7kmの標高30m程の柿木原台地南側縁辺部には前方後円墳1基、円墳4基（うち、2基は消滅）、地下式横穴墓群より構成される柿木原古墳群（県指定瓜生野村古墳）が所在する。

大淀川右岸では、丘陵南端から南東へ約2.4kmの標高7mの微高地上に大淀3号墳が所在する。大淀3号墳は、前方後円墳として県の史跡に指定されているが、現在では径40m、高さ5.5mの後円部のみが残る。調査の結果¹¹⁾、幅9.5mの周溝が検出され、周溝より二重口縁の壺形埴輪が出土している。大淀3号墳の周辺、南北1.3km、東西0.5kmの範囲には前方後円墳2基、円墳4基、横穴墓1基より構成される大淀古墳群が分布している。跡江丘陵南端から南西に1.7kmの字佃前、照明院の丘陵斜面に3基、その西方800mの字鳥越の丘陵南斜面に10基の横穴墓より構成される浮田横穴墓群（県指定生目村古墳）が所在する。その他、細江地区に円墳が、富吉地区に横穴墓が数基分布している。

集落遺跡としては、大淀川右岸の間越遺跡から後期の竪穴住居が40軒近く検出された。竪穴住居の大半は埋甕炉を有し、また、カマドを付設する住居が3軒検出された。他に、地下式横穴墓が2基検出されている。間越遺跡の南東約1.6km、標高8mの微高地上に竹之下遺跡が、その南方150mには多宝寺遺跡が所在する。ともに古墳時代後期の集落跡で、竹之下遺跡では、10軒、多宝寺遺跡では、6軒の竪穴住居が調査されている。

[古 代]

跡江丘陵西端から南へ伸びる尾根裾に深田遺跡が所在する¹²⁾。深田遺跡からは井戸が検出され、土師器の甕、坏が出土した。深田遺跡の南方2kmに余り田遺跡（Ⅱ区）が所在する。余り田遺跡の調査では流路状遺構が検出され、9世紀後半の土師器、150点あまりの墨書土器、須恵器等が出土している¹³⁾。余り田遺跡の北西約2.2kmの沖積地には奈良時代の水田跡が検出された友尻遺跡が、その南東1kmの丘陵裾には9～10世紀代の土師器の坏、甕等が出土した

芋字遺跡¹⁴⁾が所在する。

[中世以降]

中世以降の遺跡としては、前述の深田遺跡からは、10棟あまりの掘立柱建物が検出されている。深田遺跡の西方約2.5kmの丘陵斜面に迫内遺跡が所在する。迫内遺跡からは、岩肌に彫り込まれた磨崖板碑や五輪塔、板碑より構成される石塔群が検出されている¹⁵⁾。

跡江丘陵の所在する生目地域には数多くの石塔が残っている。跡江丘陵南方約800m、大谷川右岸の丘陵斜面には、16世紀後半以降の角宝塔、五輪塔、板碑等約30基より構成される平岩石塔群が所在する(現在は移転)。先述の余り田遺跡の西側丘陵の先端部(I区)には五輪塔62基、板碑11基、石塔1基で構成される石塔群が所在する(現在は移転)。石塔群の造営年代は紀年銘より16世紀代以降と考えられている。更に南方約500mの丘陵東側斜面には、14世紀後半以降の五輪塔、板碑など1,237基より構成される市指定史跡妙円寺跡石塔群が所在している。

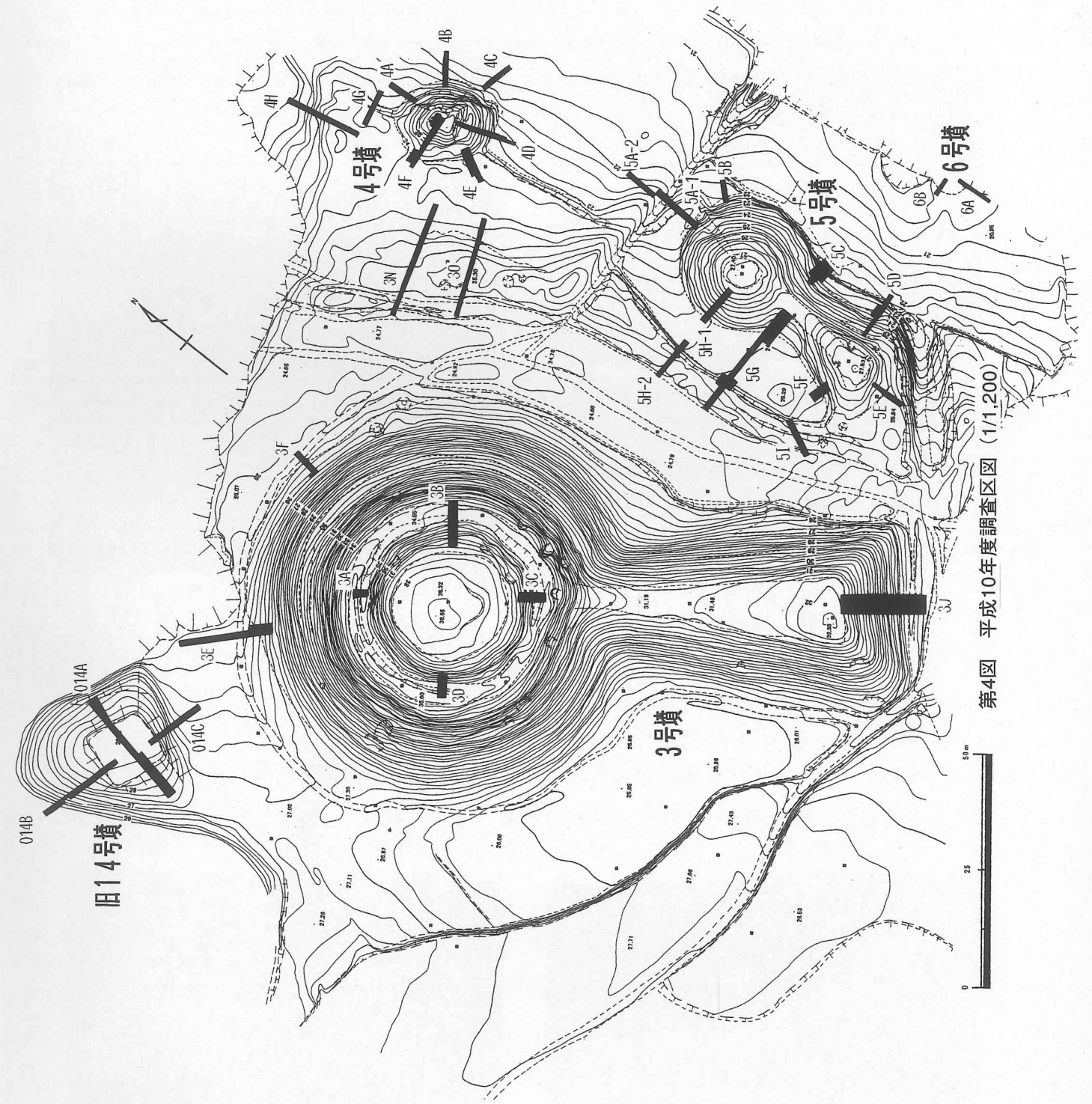
中世山城としては、跡江丘陵南東部に曲輪、堀割が残る跡江城が所在する。その他、周辺には大淀川左岸の宮崎市池内町、大字上北方に宮崎城、大字瓜生野に竹篠城、今城、大字糸原に倉岡城が、右岸では大塚町に蓬萊山城、大字浮田に石塚城、高蟬城が、大字有田に白糸城が所在する¹⁶⁾。

[参考文献]

- 宮崎市教育委員会 『史跡生目古墳群保存管理計画策定』 1977
宮崎市 株式会社都市開発設計事務所 『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』 1998
柳沢一男 「宮崎市内の古墳」 『宮崎県史叢書』 宮崎県前方後円墳集成 1997
宮崎市教育委員会 『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』 1996
宮崎市教育委員会 「石ノ迫第2遺跡」 『宮崎市文化財調査報告書』 第40集 1999
宮崎県 『宮崎県史』 資料編考古1 1989
宮崎県 『宮崎県史』 資料編考古2 1993

[注]

- 1) 宮崎県史編さん室 「考古資料紹介(二)―生目古墳群実測図から」 『宮崎県史だより』 12 1990
- 2) 宮崎市教育委員会 「下郷遺跡」 『宮崎市文化財調査報告書』 第41集 1999
- 3) 宮崎市教育委員会 「垣下遺跡」 1991
- 4) 1998年宮崎市教育委員会で調査実施。
- 5) 1998年宮崎市教育委員会で調査実施、2000年報告予定。
- 6) 1999年宮崎市教育委員会で調査実施、2001年報告予定。
- 7) 宮崎市教育委員会 「二月田遺跡・芋字遺跡」 『宮崎市文化財調査報告書』 第35集 1998
- 8) 宮崎市教育委員会 「下北方地下式横穴第5号」 『宮崎市文化財調査報告書』 第3集 1977
- 9) 宮崎県総合博物館 「下北方古墳―遺物編―」 『埋蔵文化財調査研究報告』 III 1990
- 10) 宮崎県教育委員会 池内横穴墓群調査整理委員会 『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』 1997
- 11) 宮崎県教育委員会 「大淀3号墳」 『宮崎県文化財調査報告書』 第31集 1988
※1996(平成6)年、宮崎市教育委員会が調査。墳丘及び周溝底より、二重口縁壺形埴輪が出土。
- 12) 1999年宮崎市教育委員会で調査実施、2001年報告予定
- 13) 宮崎県埋蔵文化財センター 「余り田遺跡」 『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第1集 1997
- 14) 注7文献
- 15) 宮崎県埋蔵文化財センター 「迫内遺跡」 『東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書II』 1998
- 16) 宮崎県教育委員会 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』 II詳細編 1999



第4図 平成10年度調査区図(1/1,200)

第Ⅱ章 3号墳の調査

1. 調査前の状況

古墳群最大の前方後円墳で、前方部を南東に向け、丘陵平坦面北端に立地する。規模は、現状で墳長143m、後円部径88m、高さ12.7m、前方部幅42m、高さ6.5m、前方部長59m、くびれ部幅36mを測る。後円部は、3段築成であるが、2段目上の平坦面が幅3～5mと広く、3段目は径35m、高さ3m程度の円形の土壇状になっている。墳丘の周囲には、幅20～25m程度の前方部隅角付近で収束する馬蹄形の周溝が巡り、墳丘東側には周堤とみられる土塁状の高まりが10～15m幅で残る。墳丘は、前方部の両隅角が削られている以外は良好な状態で残っている。

墳丘周囲の植生は、ほぼ全域にわたって、シイ・カシ林となっており、後円部は主にコジイが、前方部はアラカシ、マテバシイ、コジイが多く、一部に植林されたスギが混じる。その他、クスノキ、タブノキ、タラノキ等も少数みられる。北～東側周溝内もシイ・カシ林となっており、西側周溝内にはカキ、モモが植栽されている。



図版1 3号墳（南西上空から）

2. 調査の概要

今回の調査では、後円部上の円形壇、後円部北側、前方部前面、東側周堤に9つの調査区を設定し、トレンチによる発掘調査を実施した。

3A～3Dトレンチは、後円部上の円形壇周囲テラス確認の調査区である。調査の結果、各トレンチから、幅3.5～4.2m、深さ1.6～3.0mの断面V字形の深い溝が検出され、溝の埋土中から糸切底の土師器杯の小片（1～4）が出土した。また、葺石はテラス面下方の斜面上



図版2 3CトレンチV字溝（東から）



図版3 3Cトレンチ葺石（南東から）

部では良好な状態で検出されたが、円形壇斜面は、削られており葺石は残っていなかった。溝壁面の観察により、後円部の盛土には黒色土、シラスを交互に積んでいる状況が確認された。

3E・3Fトレンチは、後円部墳端、周溝確認の調査区である。両トレンチともに葺石の残りは良く、径20～45cmの砂岩円礫を用いた根石も検出された。また、基底部幅3～3.5m、高さ0.6m程度の基壇状遺構が検出され、上面には幅0.8～1.3mで、小礫が敷きつめられていた。



図版4 3Eトレンチ後円部裾（西から）



図版5 3Fトレンチ後円部裾（北西から）

3Jトレンチは、前方部前面の築造状況確認の調査区である。前方部は、2段築成で、葺石は、1段目斜面では根石から2/3程度、2段目斜面では2段目根石から1/2程度残存していた。墳端では、径30～40cm程度の砂岩を横位に据えた根石が検出され、根石近くの石は扁平な石を横置きにして積んであった。それより上部の斜面では、小さめの扁平な礫を用いた部分と大きめの円礫を用いた部分が、帯状に交互にみられ、径20～30cm程度の石を用いた縦方向の区画石列も確認された。また、墳端外側からは、後円部裾で検出された低い基壇状遺構も確認され、基壇部上面には幅1.3mの敷石帯がみられた。2段目では、標高約29.7mで小礫を敷きつめた幅1.2mのテラス面が検出され、2段目基底部では径20～30cm程度の根石が確認された。墳丘の傾斜勾配は1段目が27～31°、2段目が27～30°で、1段目根石から、2段目根石までの高さは3.7mを測る。



図版6 3Jトレンチ前方部1段目葺石・敷石（東から）



図版7 3Jトレンチ前方部2段目葺石・テラス（東から）

第三章 4号墳の調査

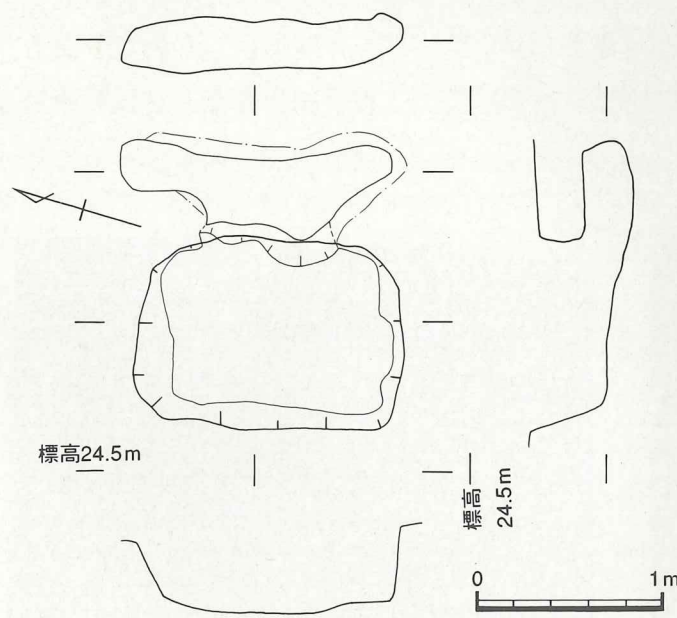
3N・3Oトレンチは、周堤確認の調査区である。調査の結果、幅15m程度、高さ0.5（東側）～0.9（西側）mを測るアカホヤ及びアカホヤ下の褐色ロームを削り出した高まりが確認された。3Oトレンチからは、周堤上西側で上幅3.6m、下幅1m、深さ0.9mの溝状遺構（道路状遺構？）が、トレンチ東側の周堤外側では地下式横穴墓（9号地下式横穴墓）が検出された。竪坑平面形は、隅丸長方形を呈し、規模は上面で長径1.45m、短径0.95m、深さ0.4mを測る。羨道は、幅0.75m、長さ0.25mを測り、竪坑底面より僅かに低くなり、玄室に向かってなだらかに下降する。玄室は、平入り楕円形のプランで幅1.5m、奥行き0.4m、高さ0.3mを測る。玄室内には、黒色土が流れ込んでおり、遺物は出土しなかった。その他、両トレンチからは溝状遺構（道路状遺構？）、土坑が検出されたが、いずれも、古墳に伴う遺構ではない。



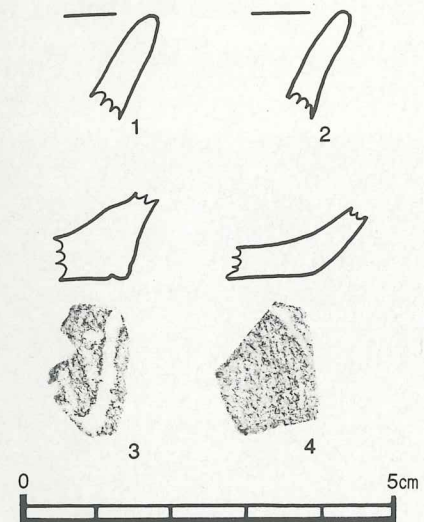
図版8 3Nトレンチ（南西から）



図版9 3Oトレンチ地下式横穴墓（南西から）



第5図 3Oトレンチ地下式横穴墓実測図（1/40）



第6図 3Oトレンチ出土遺物（1/1）

1. 調査前の状況

3号墳後円部東側、台地東端部に位置する円墳である。墳丘東側が幾分削られており、平面形は現状で、南北径20m、東西径15mのやや南北に長い楕円形を呈する。高さは、西側墳端より2m、東側墳端より4mを測る。墳頂部は後世に大きく改変されており、墳頂平坦面は狭くなっている。墳丘上には、アラカシ、マテバシイ、コジイが多く繁茂し、その他、クスノキ、タブノキ、ハゼノキ、エノキが少数みられる。墳丘周囲はスギ林が広がっている。

2. 調査の概要

調査は、墳丘の周囲に4A～4Fの6つの調査区を設定し、墳端及び周溝の確認を行った。このうち、4D・4Fトレンチについては墳頂まで延長し、段築、葺石の確認もあわせて行った。その他、古墳の周辺、4号墳を挟んで南北に伸びる段落ちの確認を4Gトレンチで、4号墳北側の丘陵斜面の状況確認を4Hトレンチで行った。

調査の結果、墳丘周囲のトレンチから周溝は検出されず、葺石もみられなかったが、4D・4Eトレンチで墳端が確認された。4Fトレンチでは、墳頂部の表土を20cm程掘り下げた所から、径5～20cmの円礫が2m四方の範囲にわたって検出され、礫間から土師器の小片が20数点出土した。また、墳頂端付近では赤色顔料が検出された。その他、4号墳に伴うものではないが、4Hトレンチから東西方向に伸びる幅1.6m、深さ0.4mを測る溝状遺構が検出された。



図版10 4号墳（西から）



図版11 4Fトレンチ（西から）



図版12 4Fトレンチ墳頂部配石遺構（東から）

第IV章 5号墳の調査

1. 調査前の状況

3号墳前方部東側、台地東縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は、西から東へ下る傾斜地に立地し、古墳の東側は、開墾の際に掘削されており、特に前方部隅角は大きく削られている。古墳の規模は現状で、墳長54m、後円部径29m、高さ4.4m、前方部幅24m、高さ4.5m、前方部長26m、くびれ部幅12mを測る。墳丘の北側から西側にかけては、幅8m程の周溝が巡り、その外側には西側のみ周堤状の高まりが確認できる。現在、前方部にはアラカシ、コジイが、前方部東側周溝にはスギが、周堤上にはアラカシ、コジイ、マテバシイ等が繁茂している。

2. 調査の概要

調査は、古墳の周囲に11の調査区を設定して行った。5A・5B・5H-1トレンチは、後円部築造状況確認の調査区である。いずれのトレンチからも葺石、周溝が検出された。葺石の多くは原位置をとどめておらず、葺き方も丁寧ではない。墳端は、境界石、樹根によって部分的に攪乱をうけていたが、5H-1トレンチでは標高24.4mで、5Aトレンチでは標高22.5mで確認された。5H-1トレンチでは、標高25.5m付近で、傾斜が変わっており、テラスが巡るものと思われる。5Aトレンチでは、墳端外側から基底部幅2m、高さ0.3m程の地山整形による基壇状遺構が確認された。



図版13 5号墳（東から）

5C・5Gトレンチは、くびれ部の築造状況確認の調査区である。両トレンチから葺石が確認され、5Cトレンチでは、根石と思われる石列が、5Gトレンチの後円部側では、径15～20cm程度の偏平な円礫を用いた葺石が良好な状態で検出された。5Gトレンチでは、西側周溝、周堤の調査もあわせて行い、墳端付近の周溝から土師器壺(6・7)が出土した。西側周堤上では、土壙墓が検出された。墓壙は2段に掘り込まれており、主軸は南北方向で、墓壙掘り方は隅丸長方形を呈する。規模は墓壙上段が主軸長2.6m、幅1.1m、深さ0.4m、下段は主軸長1.75m、0.45m、深さ0.2mを測る。また、墓壙テラス面北側及び南東隅には、厚さ15cm程で、アカホヤ混じりの粘質土が貼られており、下段墓壙の埋土中から刀子(5)が出土した。

5D・5E・5Fトレンチは、前方部の墳端確認の調査区である。5Eトレンチでは、前方部の墳端が標高25.3mで確認された。5D・5Eトレンチからは、葺石が検出されたが、墳丘斜面下部では原位置を保っておらず、根石も確認されなかった。

5H-2・5Iトレンチは、周堤確認の調査区である。周堤はアカホヤ及び、アカホヤ下の褐色ローム土を削り出して構築されており、基底部幅4.4～5m、高さ0.55～0.75mを測る。



図版14 5A-1トレンチ後円部裾・周溝（北から）



図版15 5H-1トレンチ後円部斜面（西から）



図版16 5Cトレンチ東側くびれ部（東から）



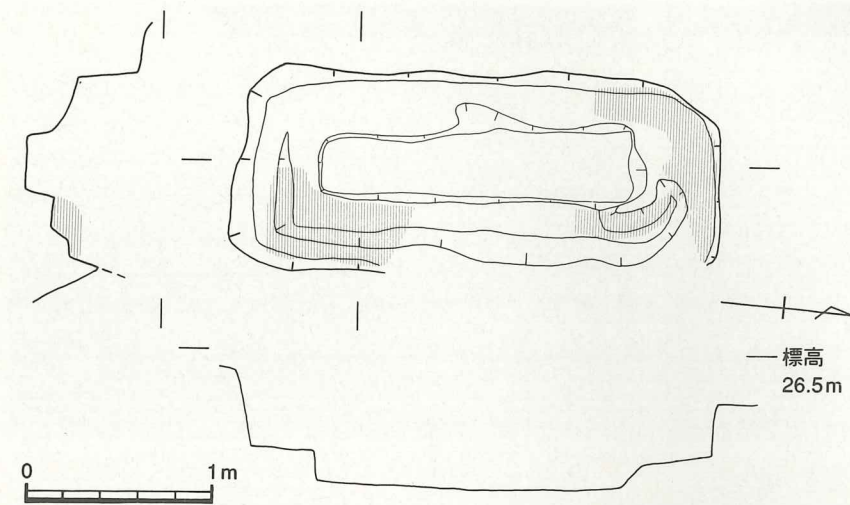
図版17 5Gトレンチ西側くびれ部（西から）



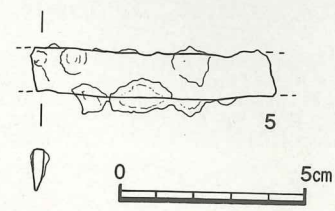
図版18 5Eトレンチ前方部前面（南から）



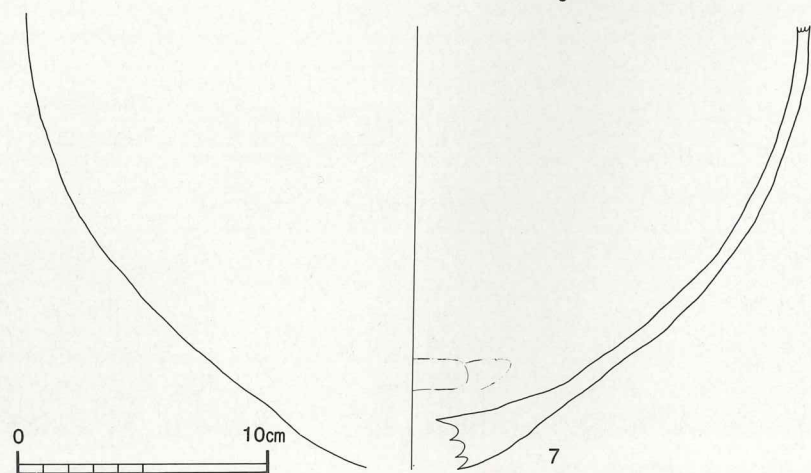
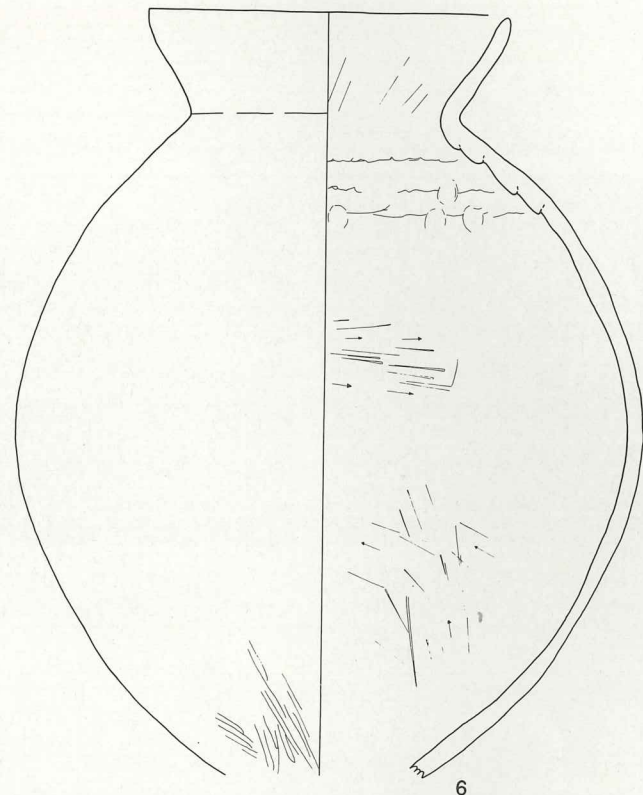
図版19 5Gトレンチ土壙墓（南から）



第7図 5Gトレンチ土墳墓実測図 (1/40)



第8図 土墳墓出土遺物 (1/2)



第9図 5Gトレンチ出土遺物 (1/3)

第V章 6号墳の調査

1. 調査前の状況

5号墳の東側、一段低くなった標高21m程の台地東縁辺部に位置する円墳で、墳丘の周囲は削平され、東側は急崖になっている。古墳の規模は現状で、径8m、高さ1mを測る。墳丘上は雑木が生い茂っており、コジイが多く、他にアラカシが少数認められる。

2. 調査の概要

墳端及び周溝の確認のため、墳丘の南側に6Aトレンチ、西側に6Bトレンチを設定した。調査の結果、6Aトレンチからは東西方向に伸びる上幅6m以上、下幅0.8m、深さ1.5m程度の掘り割った道路状遺構が検出された。6Bトレンチでは表土層を深さ20cm程掘り下げ、アカホヤを検出するが、周溝は確認出来なかった。墳丘斜面から葺石は検出されず、墳頂部から、10～25cm程の円礫が十数点検出された。

遺物は6Bトレンチ墳丘斜面腐食土より、土師器の小片が数点出土したのみである。



図版20 6Aトレンチ (西から)



図版21 6Bトレンチ (南から)

第VI章 旧14号墳の調査

1. 調査前の状況

3号墳の周溝を挟んだ北西側、丘陵が岬状に突出した部分に位置し、三方は急崖となる。本古墳は円墳として指定されているが、新番号は付されていない。墳頂部には、かつて高压鉄塔が建っており、頂部は削平されているが、現在、高さ約2mの古墳状の高まりが残る。墳丘上はコジイ、アラカシ、サカキが多く、マテバシイ、エノキが少数見られる。

2. 調査の概要

調査は古墳であるか否かの確認のため、頂部及び斜面に3箇所の調査区を設定して、アカホヤ面直上まで掘り下げた。調査の結果、014Aトレンチでは墳頂部から幅0.6mの墓壇が検出され、墳頂部北端付近からは土師器の高坏(8)、壺の口縁部(9)が出土した。また、トレンチの北端では、西側からなだらかに屈曲して北側の斜面に向かって伸びる幅70cm、深さ20～30cmを測る溝状遺溝が検出された。墳丘は、土層断面の観察から、墳端付近はアカホヤ、墳頂付近は黒色土の削り出しによって築造されているとみられ、盛土は確認できなかった。



図版23 旧14号墳主体部-014Cトレンチ(東から)



図版22 旧14号墳墳頂部-014Aトレンチ(南から)

第10図

第VII章 まとめ

国指定史跡生目古墳群保存整備事業に伴う発掘調査初年度にあたる平成10年度の調査は、3・4・5・6・旧14号墳の5基について実施した。各古墳の調査結果を再度概括して、まとめにかえる。

1) 3号墳について

各トレンチから良好な状態で葺石が検出され、3E・3F・3Jのトレンチでは、根石が確認された。また、墳端外側の基壇上面、前方部1段目テラス面に小礫を敷くという特異な構造を持つことが明らかになった。

後円部2段目テラス面では、薬研堀が検出され、後円部は中世に山城もしくは陣として大きく改変されており、現在観察される円形壇、平坦面の状況が古墳築造当初の形態とは異なる可能性が強まった。

2) 4号墳について

調査の結果、古墳は西から東に向かって緩やかに下る傾斜地に築造されており、周溝、葺石等の外部施設を伴っていないことが確認された。また、墳頂部から検出された円礫を用いた配石遺構については、後世の造作によるものと思われる。墳丘の一部が削平され、墳頂部は改変を受けているが、径21m、高さ3.5m(南側から)程度の円墳に復元できる。

3) 5号墳について

各トレンチから葺石が検出されたが、明確な根石は確認できなかった。後円部は、二段築成で、墳端には低い基壇が巡ると推測される。また、テラス面、基壇上面には3号墳で検出された敷石をもたないことが確認された。周溝については、墳丘の北側及び西側では検出されたが、前方部前面では周溝外側の立ち上がり作業道によって切られており、前方部前面まで巡っているかどうかは確認できなかった。くびれ部西側の周溝より出土した壺は、口縁部はやや内彎しながら外傾して短く伸び、端部は丸くおさめ、胴部は中位が最大径となり、卵形を呈する。調整は、外面底面付近にミガキを、内面は底部付近に下方から上方への、中位に横方向のケズリを施している。時期は4世紀後半でも終わり頃のものと思われる。

墳丘の築造方法については、墳丘下部は地山削り出しで構築されており、南西から北東に向かって下がる傾斜地に立地している。現状では後円部頂と前方部頂の標高はほぼ同じであるが、主軸上の前方部端が後円部端よりも約2.8m高く、墳端の比高差を墳頂で揃える工法をとっていると思われる。また、後円部で確認されたテラスは、くびれ部の高さと同レベルで、巡るものと見られる。

4) 6号墳について

今回の調査では、6号墳の墳端、周溝は検出されず、古墳の規模を明確にすることはできなかった。また、墳頂部から検出された円礫群は4号墳頂の配石とは様相が異なり、主体部に伴

うものである可能性もある。

5) 旧14号墳について

墳頂より主体部と思われる墓壙が検出され、付近から供献土器と思われる高坏が出土したことにより、古墳である確証を得た。墳丘盛土、明確な墳端が確認できなかった点に疑問が残るが、現時点では径20m程度の円墳と推測される。また、トレンチ北端で検出された溝が古墳に伴うものであるとしたら、径26m程度の円墳に造出しを有する可能性もある。

10年度の調査では、3号墳葺石の良好な遺存状況、3号墳の墳端外側、前方部テラス面を巡る敷石帯、旧14号墳が木棺直葬を主体部とする円墳であること等、今後の保存整備の基礎資料となる遺溝を検出することができた。また、5号墳くびれ部西側周溝内出土の土師器壺、旧14号墳墳丘より出土した高坏等、古墳群の築造年代に関する貴重な資料を得ることができた。その一方で、3号墳後円部上の円形壇周囲テラスから薬研堀が検出され、中世に山城もしくは陣に改変されていることが明らかになり、現在見られる円形壇が古墳築造当初の形態を留めているという結論は保留された。その他、3号墳周堤東側から検出された地下式横穴墓、5号墳周堤上より検出された土壙墓は、今後古墳群の構成、変遷を検討していく上で新たな問題を提起した。

最後になりましたが、発掘現場に足を運んで下さり、貴重なご助言、ご指導いただいた諸先生方ほか、関係者各位のご理解とご協力に感謝申し上げますとともに、なお一層のご指導、ご鞭撻をお願い致します。



図版24 5Gトレンチ出土遺物



図版25 014Aトレンチ出土遺物



図版26 平成10年度調査区全景



図版27 前方部前面葺石(南東から)

報告書抄録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん							
書名	史跡 生目古墳群							
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書 I							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	鳥枝 誠							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いきめこふんぐん 生目古墳群	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 おおあざあとえ 大字跡江	45201		° ' " 31 56 54 付近	° ' " 131 23 15 付近	19981215 19990331	510	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
生目古墳群	古墳群	古墳時代	3号墳-葺石、周溝 4号墳-配石遺構 5号墳-葺石、周溝 6号墳-主体部? 旧14号墳-主体部	土師器 (壺、高坏) 須恵器				
		中世以降	薬研堀 溝状遺構	土師器(坏)				

史跡 生目古墳群

保存整備事業 発掘調査概要報告書 I

2000年3月

発行 宮崎市教育委員会

